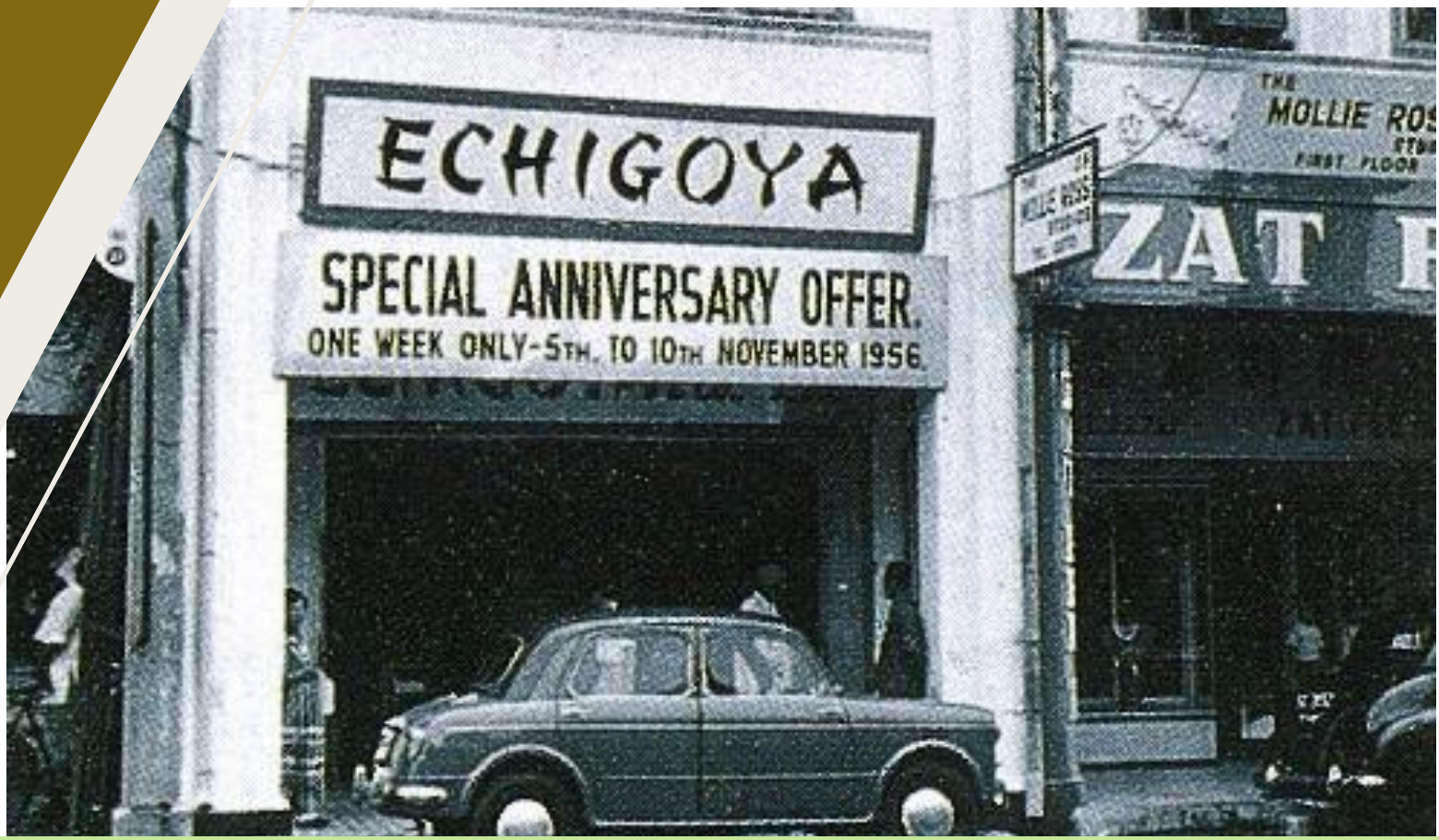


史蹟史料部

2025 年 1 月 10 日

#63

日本人墓地公園　ニュースレター

「越後屋」支配人 福田庫八の顕彰碑

今回は日本人墓地公園メモリアルプラザにある「越後屋」支配人 福田庫八の顕彰碑をご紹介します。

庫八は 1903（明治 36）年 2 月 19 日、群馬県前橋市に生まれました。生家はニュースレター#62 でご紹介した越後屋店主・高橋忠平が幼少時養育された須田家の遠縁に当たります。

1916（大正 5）年、忠平が親不孝を重ねてきた罪滅ぼしに、両親の墓を造りに帰国した際に、遠縁に当たる福田家に墓づくりの世話になりました。

若い頃の庫八

その礼をしようとした時、礼の代わりに庫八をシンガポールに連れて行ってくれと泣きつかれました。庫八の母は妻子ある男性と恋をし、二人の私生児を生みました。そして母はとうに別の男性に嫁ぎ、庫八は小さい時から孤児のように淋しく育ったのでした。

庫八の養育を託された忠平に連れられ、小学校を卒業したばかりの 13 才でシンガポールに渡りました。1916（大正 5）年 6 月 27 日、庫八はシンガポールのジョンソン・ピアに到着。それが庫八とシンガポールの出会いでした。

越後屋で働き始めた庫八が苦労をしたのは、忠平の厳しさ以上に、全員が柏崎商業の卒業生から選ばれたエリートの同僚たちでした。庫八は先輩たちから、教育のなさや育ちの悪さを種にいじめられ、その口惜しさをバネに、語学の勉強に励みました。

忠平に見込まれた庫八はアングロ・チャイニーズ・スクールに入学し、卒業までの 5 年間、英語と中国語を徹底的に学びました。

越後屋は主にからゆきさんが身に付ける着物や装飾品を扱っており、いつも娼楼のおかみに連れられて着物を買う、からゆきさんたちの賑やかな声が店に満ちていたそうです。

まだ十代だった庫八の目には、からゆきさんたちが、それほど不幸にも、悲しげにも見えませんでした。家族にお金を送り、自分も小遣いをため、いつかは故郷に錦を飾ろうと楽しみに生きていました。

「今の人たちは、何も事情を知らないで、不幸、不幸と決めつけるけど、あの頃は仕方なかった。彼女たちは喜んで家族のために稼ぎに出たのですよ…知らぬ人が想像するほど悲劇的じゃあないのですよ」と、八十才を迎える頃に雑誌のインタビューで庫八が答えた記録が残っています。

シンガポールのからゆきさんたち

1920（大正 9）年の廃娼令に伴い、からゆきさんに着物や装飾品を売ることがなくなった越後屋は、欧州人を相手に洋服も販売するようになりました。

1927（昭和 2）年、在留英国人によるオペラ「ミカド」公演に際し、越後屋に舞台衣装の注文がありました。英語に堪能な庫八はこの注文を見事にこなし、この頃から英国人の顧客も増えていきました。

ミカド公演から 2 年後、庫八は忠平の勧めで須田家の娘ミイと結婚。忠平の見込みどおり庫八は頭角を表し、支配人になりました。

1937（昭和 12）年 5 月には越後屋をミドルロード 131 号へ移転。

当時エレベーターがあったのは、ここだけだったそうです。

越後屋新店舗に取り付けられたエレベーターに乗っている支配人の庫八

しかし 1939（昭和 14）年、当時の戦争の実情を国外から見ていたシンガポール在留日本人たちは、身の危険を感じて日本に帰り始めました。庫八の妻ミイも 4 人の子を連れて日本郵船「照国丸」で帰国。イギリス人と特に親しくし、お得意さんも多かった庫八でしたが、戦争となればどうすることもできませんでした。

開戦後、イギリス軍に抑留され、チャンギ刑務所に放り込まれた庫八は捕虜となり、マレー、インドで抑留生活を送りました。

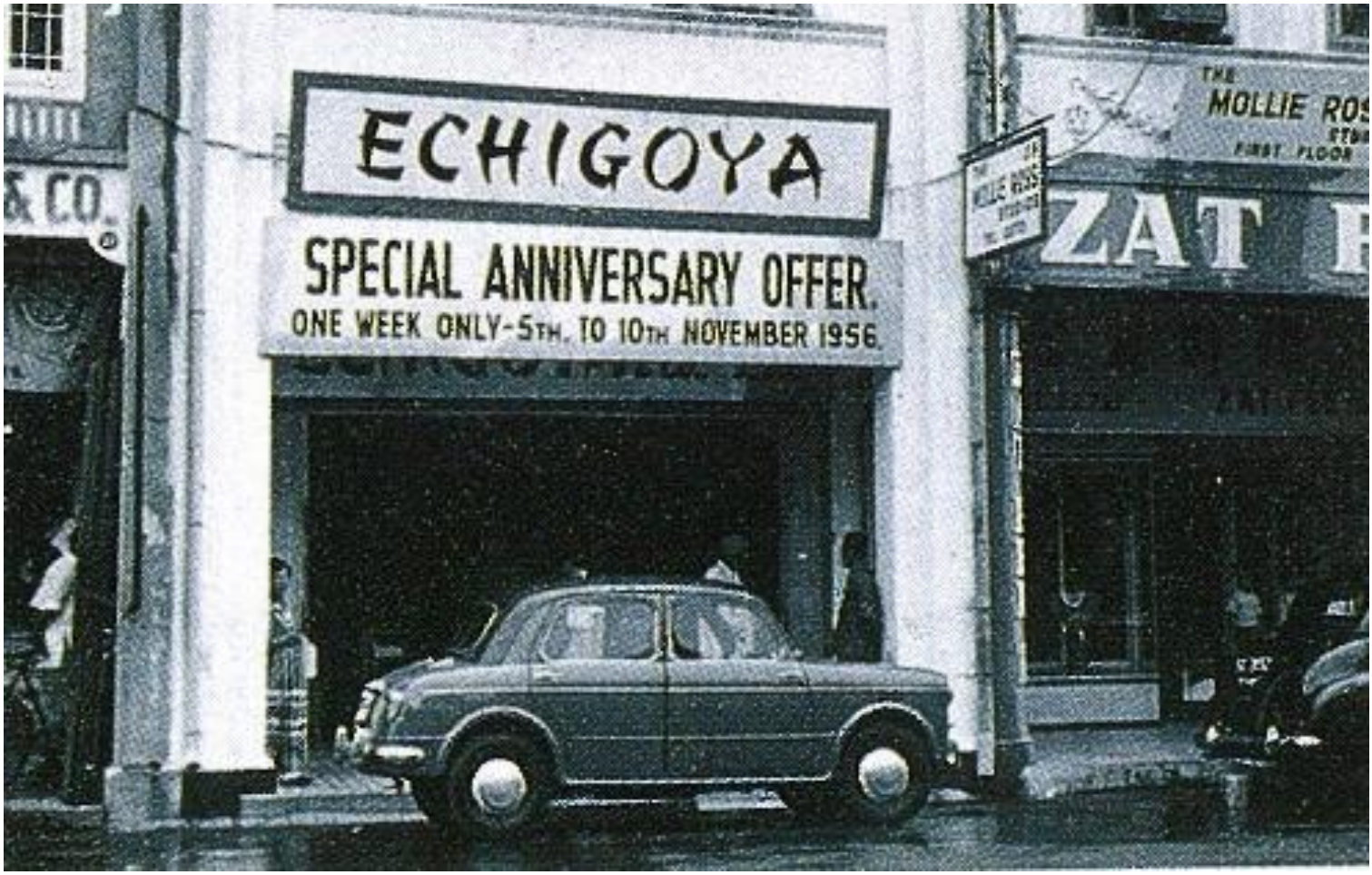
1941（昭和 16）年 2 月に日本軍がシンガポールを陥落させた時、庫八をはじめ捕虜たちは捕虜交換船で日本に帰るチャンスを得ました。

ところが船がシンガポールに着いた時、突然、庫八は下船を命じられました。日本軍は、語学に堪能で現地にくわしい庫八が必要だったのです。そうして占領時代、庫八は通訳、繊維配給監督官、日本人居留民団長を務めました。

1945（昭和 20）年、敗戦に伴い庫八ら在留邦人は日本に強制送還されました。

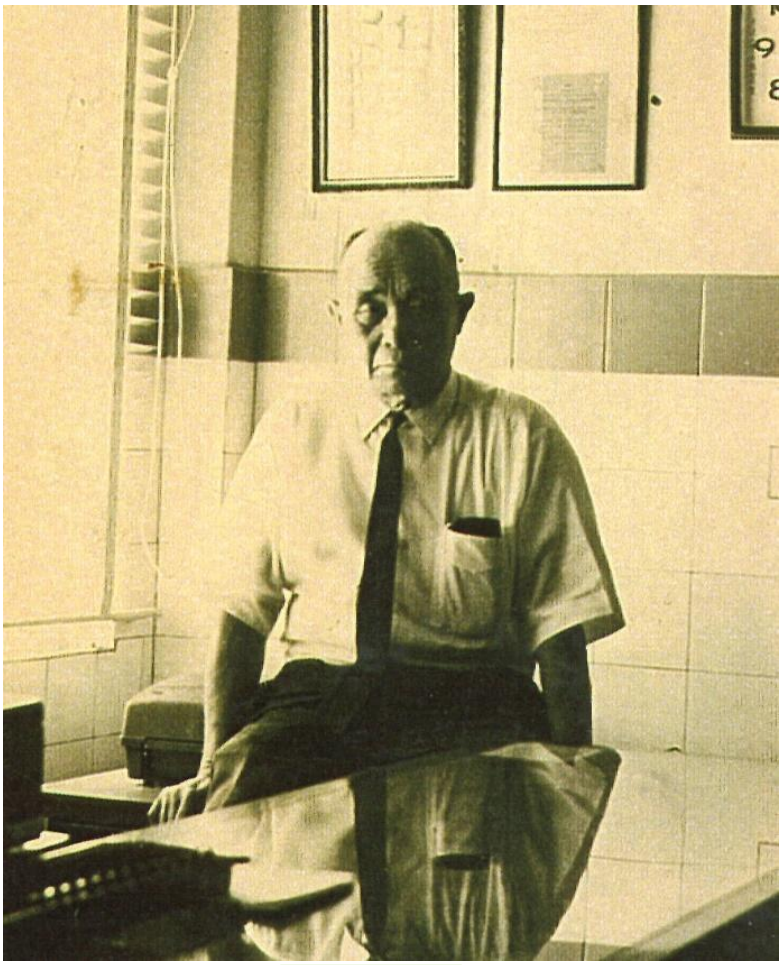
1954（昭和 29）年、庫八は民間日本人として戦後初めて入国を許されました。このことは、庫八の熱心な嘆願書と、若い頃から培った現地の人々との交流や、イギリス人との親密な交流のたまものでした。庫八は、どんな苦労が待っていようとも、13 才から暮らしたシンガポールに帰りたかったのです。

1955（昭和 30）年、越後屋は「株式会社越後屋 1955」の名で戦後初の日本企業として復活。



戦後の越後屋 1955 の店舗

越後屋 1955 の店頭に立つ庫八



1971 年撮影

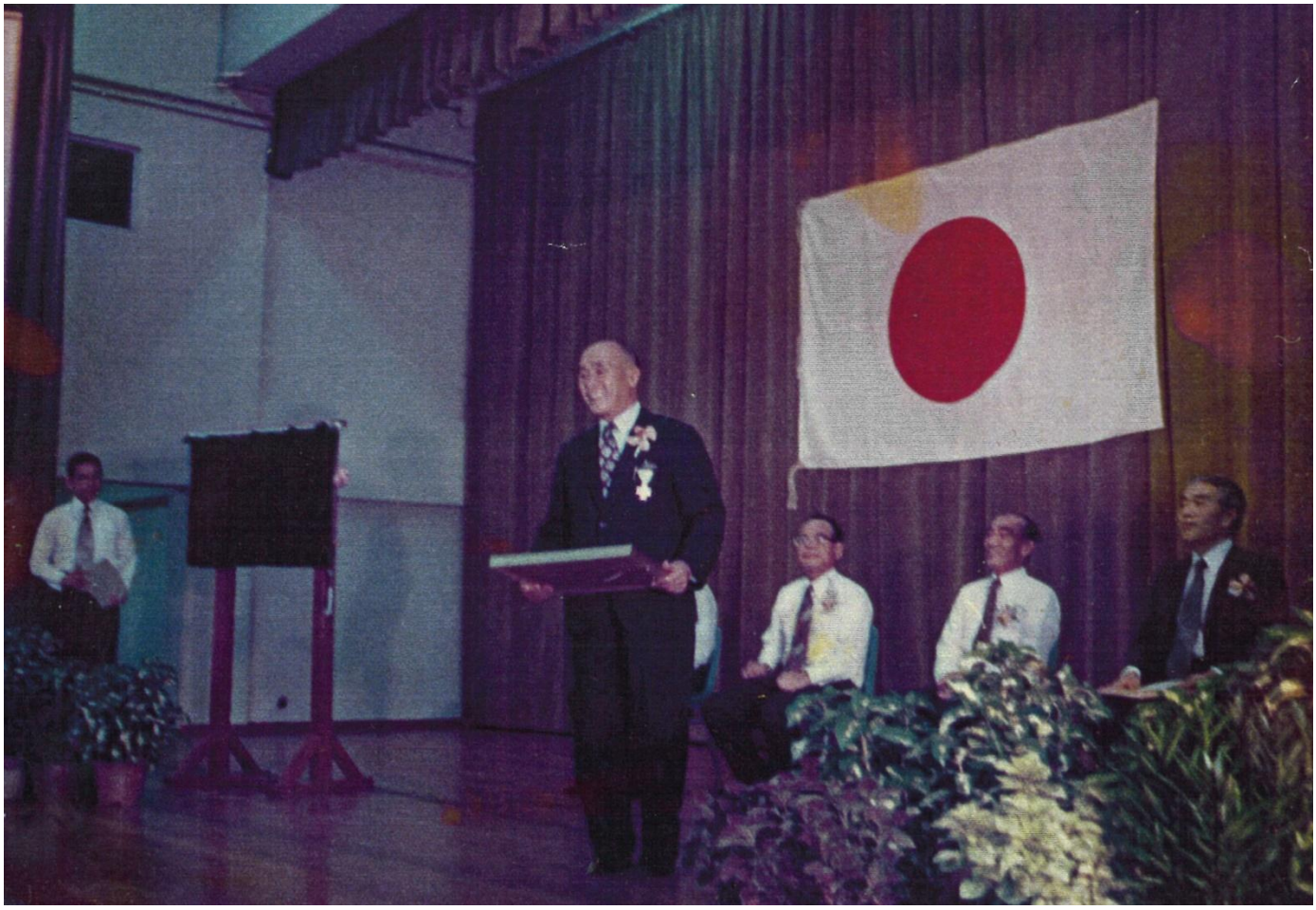
庫八は日本人会の再建に尽し、シンガポールに増えていった日本人の相談相手になることも重要な仕事になっていきました。

戦争を挟んだ 10 年以上の空白の月日は、人々の認識に大きな断層を生みました。

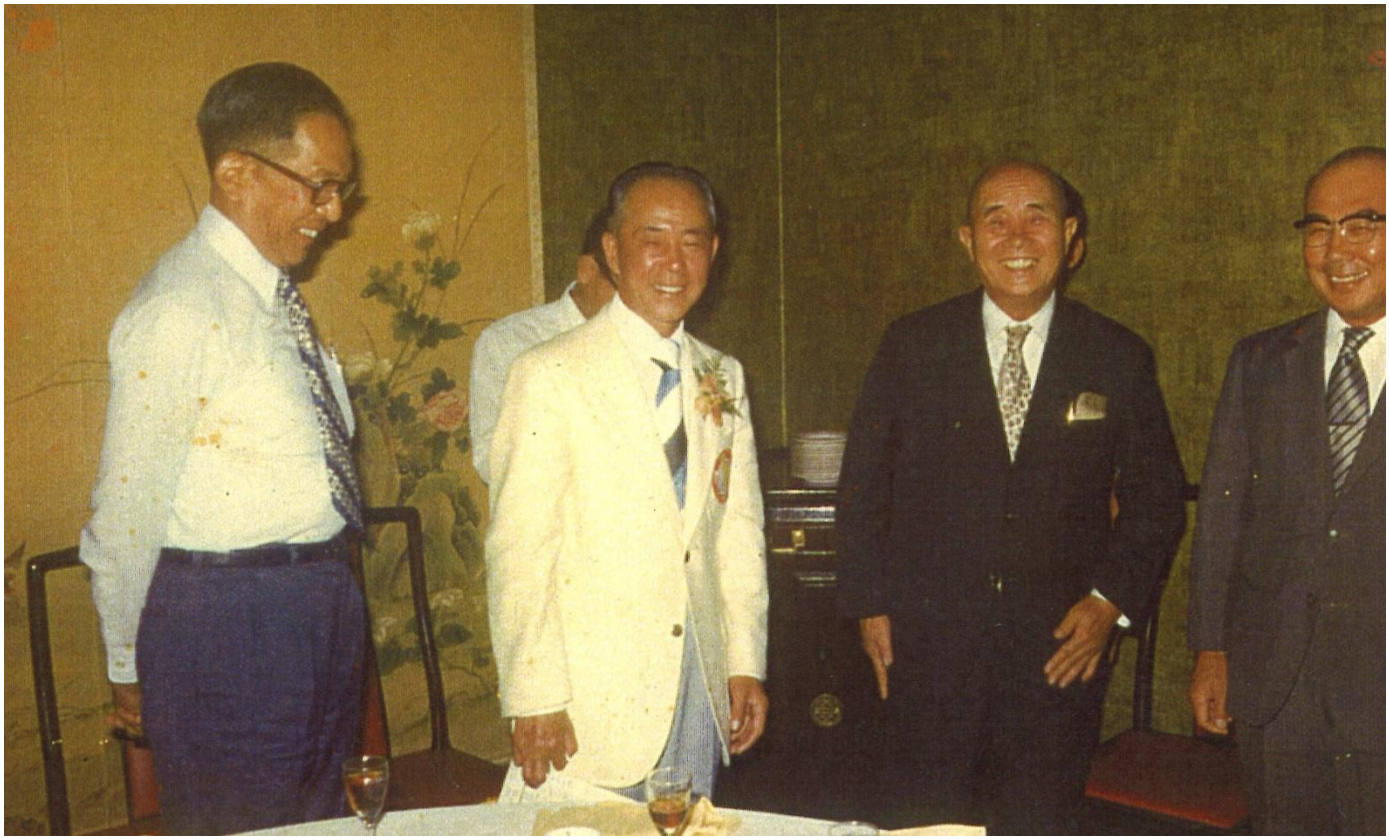
戦争を知らない世代には戦前が無関係になり、戦前を知っている日本人とシンガポールの人々にとっては、同じ日本でした。庫八は、その「戦前」と「戦後」、そしてシンガポール人を結ぶ重要なパイプ役となったのです。

庫八は、戦前からシンガポールに残っていた数少ない日本人たち、老いたからゆきさんたちの面倒も見ていました。

またニュースレター#58でご紹介したように日本人墓地管財人として整備、管理を務め、墓地の土地と引き換えに日本人小学校クレメンティ校の校地確保に貢献しました。



クレメンティ校落成式で表彰を受ける庫八



日本人学校校歌披露パーティにて。右から2番目が庫八。白い服の男性は校歌を作曲した藤山一郎氏。

1974（昭和 49）年、日本政府より「勲五等瑞宝章」受賞。

1977（昭和 52）年越後屋を閉店、1980（昭和 55）年帰国。

1986（昭和 61）年 3 月 2 日、83 才で亡くなりました。

戦後、シンガポール政府から何度も老朽化した日本人墓地の取り壊しを要求されましたが、そのたびに庫八は政府と話をつけ、墓地を守り続けました。

それは、忠平に連れられて 13 才でシンガポールにやってきた庫八が、この地で長い人生を生きてきた証のようなものだったのでしょう。

「わたしがいなくなったら、日本人墓地もどうなるでしょうな…、もう、そんな心配をしてみたってしょうがないと思いながら、つい考えてしまうのですよ。日本人学校の生徒たちもいつまで掃除をやってくれるだろうかとかね…。なにしろ、みんな戦前とは無関係の人たちばかりになるのですからね…」

庫八のインタビューには、そう綴られていました。

ニュースレターでもご紹介させていただいているとおり、現在も、日本人学校の生徒さんたちは毎年、墓地公園の清掃に来てくださっています。それ以外にも、ボーイスカウト、大学の同窓会、都道府県の会、企業の有志の皆さん、そして毎月御堂をお掃除してくださるグループの方々もいらっしゃいます。

先人が静かに眠るこの墓地を、これからも日本人会史蹟史料部で管理して参ります。

参考文献：
「戦前シンガポールの日本人社会 - 写真と記録 - 改訂版」シンガポール日本人会　1998 年 6 月 27 日発行
「シンガポール越後屋終焉記」中央公論　1978 年 7 月 1 日発行